

感想——映画『どうすればよかったか?』

針乃夢史郎

学生時代に姉が統合失調症を発症するが、両親はその事実を受け入れない。適切な治療を受けさせないまま、延々家に留め置いてしまう。その現実には憤りを覚え続けた弟は、やがて映像作家のたまごとなり、帰省のたびに実家の三人に向けてカメラを回しはじめる……。

『どうすればよかったか?』は、二〇二四年十二月に公開された日本のドキュメンタリー映画です。監督の藤野知明が、病気になった姉とその両親、それを見つめる自分自身の姿を何十年にも渡って撮り続けた、文字通り一生モノの作品だと思います。

統合失調症は若いときに発症することの多い精神疾患で、幻覚や妄想、感情の鈍化や意思疎通の困難など、さまざまな症状があるそうです。原因ははっきり分かっているませんが、早期に治療を始めることが大切で、現在では医療の進歩により回復可能な病気とされています。

もともと今作では、撮影者たる弟の監督がまだ子供だったこともあり、お姉さんの病状が悪化していく最初の九年間ほどは撮れていない。おそらく彼自身が「家」という環境から抜け出すために地元の北海道を離れて神奈川県に就職。その後お金を貯めて三十一歳で映画学校に入学。撮影&インタビューという、自身の現実を相対化する

ための「方法」を手にしたのち、実家へ帰るたびにカメラを回すようになる。そうした作品全体の枠組みと視座を、冒頭でちゃんと語っているところがいいです。記録としての不完全さも含めてね。

一家四人での週末の行楽シーンから始まる本編は、あたかもごくありふれたファミリー・ムービーらしい雰囲気なぞついているかのようです。しかしその中でも姉ひとりの様子があきらかに「ふつう」でなく。そうして両親へのインタビューや一家「団欒」のシーンなどが積み重なっていくにつれ、撮影者たる弟が危惧している事態がどんどん露わになっていきます。彼は撮影の傍ら両親に対し、過去のたった一度の診断を過信するのではなく、もう一度姉を医者连接到っていくよう再三説得します。しかしそのほとんどは、成果のないディスコミュニケーションのままに終わってしまいます。

もともと研究医であつた両親は、最初に医者に連れていって以降はセカンドオピニオンを仰がず、「変わって」しまった姉をそのまま自宅に放置してしまう。やがては玄関に鎖を巻きつけ、実質軟禁状態にまで置きながら……。病気になってしまった娘を認めたくないからなのか、世間の目に晒したくないからなのか。まだこの病気が「精神分裂病」と呼ばれていた時代の話であるがゆえ、という部分も大きいかもしれません。

ともあれ、医科の学生であつた娘が国家試験に挑戦す

ることは依然求める一方で、自分で自分をどうにもできない状況に追い込まれた彼女がハマっている星占いは二歩もなく否定する。ご両親は互いに互いの責任を庇い合い、そのせいでお姉さんが犠牲になつていっているように見えなくもない。そうして序盤で弟が姉に対して投げかける、「お父さんお母さんのこと、恨むばっかじゃないよね?」という言葉には、むしろ弟自身の思いが強くにじみ出ているように思える……。

しかし、事態が一向に進まないあいだも画面内ではまたたく間に歳月が過ぎていき、役者ではない彼ら一家には現実の「時間」が容赦なく襲いかかっていくこととなります。そして弟のカメラは、その過程をも激しい演出無しに冷静に捉えていきます。



映像を記録し構成し発表するという行為には、さまざまな解釈に向けて開かれている現実世界を、観察者の価値観でもって意味づけ規定する、という側面があります。それはあえて強い言葉で言うなら、(文学と同じく)表現行為という特権性に基づく一種の攻撃性や暴力性と捉えることも可能だと自分は思います。しかしそれを本作では、他ならぬ作り手自身の肉親——特にご両親の責任、という部分に向けているところが何とも衝撃的でした。

この映画のキャッチコピーは「言いたくない 家族のこと」。どれほど円満な関係であつてもそうそう他人には見せたくないであろう自分自身の「家」のありさまを、家族かつ撮影者という立場から切り取っていく手つきの背後には、どれほどの葛藤があつたのだろうと思わされました。それに上に書いたような映像の特権性というのは、裏を返せば「すでに起きてしまった出来事」の記録に過ぎないということでもあります。どれほど現実の出来事を写し撮つても、それ自体を巻き戻したり改変したりすることはどのみちできないという。そういうことも考えさせられる作品でした。

個人的には特に、家庭という権力関係においてもっとも弱くて、状況への責任ももっとも薄かった当事者のひとり、この作品を撮り語っているという、その微妙な不安定さこそが一番の見どころの映画かも、と思ったりしました。撮るという行為が現実に対する精一杯の抵抗であつたと同時に、そこには語り手である弟監督自身の「弱さ」と、それに対する忸怩たる思いが垣間見える気もする。そうした単一の価値観に還元できないナマの人間の複雑さのような部分が、フィクションではなくてドキュメンタリー映画であることのある意味最大の醍醐味かもしれないと。

この映画への反応をネットで検索すると、観た人の感想がほんとうに千差万別なところも良い部分ではないか

と思います。実際の出来事を撮っているから解釈の余地がないかと言うとむしろ逆。余計な枝葉を取って整えられた作り物語にはおさまらない部分がたくさんあるからこそ、逆に無数の切り口が生じていて、いろんな想いや体験を投影して観られるし、自分の家族を省みざるを得ないところもあるし。

愛憎どちらかで一刀両断することのできない家族というものを、愛憎ないまぜのまま捉えた映画。答えなんかない世界⇨現実を映しているがゆえに力を持っている作品だと思います。

（公開・二〇二四年／監督・藤野知明／制作・浅野由美子  
／製作・動画工房ぞうしま／配給・東風）